ヘスとマルクス

谷口健治

【要約】一八四三／四四年の冬パリに於てカール・マルクスは社会主義に転じた。当時彼の周辺にはモーゼス・ヘスがいた。ヘスは一八三七年以来私的所有の廃止を展望する立場を取り、一年程前にはエンゲルスを社会主義に引き入れた人物である。そこでヘスはマルクスの社会主義への転向に影響を与えたかという問題が生じてくる。この設問は、ヘスが丁度同じ時期に「貨幣制について」と題する論説を執筆し、「貨幣は人間の外化された能力である」という議論を展開していただけに現実味を帯びてくる。本稿では、一八四三年から四五年に掛けての周囲の情況をも考慮しつつ、ヘスとマルクスの、フォイエルバッハに対する態度、市民社会像、自ら標榜する主義等を分析・比較し、ヘスのマルクスへの影響という問題、更には両者を「哲学的社会主義者」として一括出来るか否かという問題を解明する。

史林　五九巻一号　一九七六年一月

はじめに

モーゼス・ヘスとマルクスが共に、ライン州のユダヤ系の家庭に生を受け、前三月期（Vormärz）のヘーゲル哲学解体に係わる中で思想形成を遂げた社会主義者であること、両者の思想上の軌跡が一時的にであれ交錯していることからすれば、〃科学的社会主義〃の発展に全力を傾けたマルクスと、シオニズムへ逸脱せざるを得なかったモーゼス・ヘスとを、思想と生涯の全体像について比較して見るのも、意味のないことではないだろう。しかし本稿の目指しているのは、そうした全体的な比較論ではない。我が国に於ては、ヘスの存在が専ら初期マルクス研究を通じて知られるようになったため、一般に「ヘスとマルクス」なる表題の下では〃社会主義の先行者としてのモーゼス・ヘスは若きマルクスに影響を与えたか〃

という、より慎ましい問題を扱うものと了解されている。本稿の「ヘスとマルクス」という表題も、勿論この事情を念頭に置いてのことである。但しヘスのマルクスへの影響だけを問題にしようというのではない。ヘスはマルクスの同時代人であり、しかも前三月期には行動を共にした間柄である。ヘスのマルクスへの影響という時、そこには自ずから、例えばヘーゲルといった先人の影響を検討する際とは異なった局面が現われてくる。影響の問題は、飽く迄も周囲の思想情況への両者の対応やその対応の相互連関の一部分として取り扱われなければならない。こうした視野の拡大なしには、影響の問題を解明する作業そのものが歪みを免れまい。従って、丁度両者の交流期に当る前三月期に時期を限定して、その時期の具体的な思潮の流れの中でヘスとマルクスの思想上の係わりを明らかにすること、これが本稿の課題ということになる。ヘスとマルクスの弁証法の優劣比較や、ヘスを媒介とした初期マルクスの終末論の解明といった類の論議が、こうした本稿の埒外にあることは、断わるまでもないだろう。

一

前三月期に於けるマルクスの経歴をここで繰り返すには及ぶまい。また、最近様々な形で紹介されているので、モーゼス・ヘスの閲歴にも立ち入らない。[1] ここではヘスとマルクスが直接交際していた時期に限って、その様子を概観しておけば事足りる。両者の交流の跡を辿れば次のようになる。

(i) 一八四一年八月末。ヘスとマルクスが初めて出会ったのは一八四一年八月も終りの頃と考えられる。この年の中頃『ライン新聞』の創刊運動を始めた人々の間には、当時ボンに居を構えていた青年ヘーゲル派のブルーノ・バウアーやマルクスを寄稿者として獲得しようという動きがあった。創刊運動の中心となって活動していたヘスがマルクスと会ったのは、そのような動向の一環である。最初の出会いからマルクスはヘスに強い印象を与えたらしく、マルクスの哲学的才能を誉めちぎった手紙をヘスは友人に宛て出している。[2]

(ii) 一八四二年一〇月中頃―一二月中頃。翌一八四二年一〇月マルクスは『ライン新聞』の第三代編集長としてケルンに移った。創刊運動での功績によって編集部内でフランス関係の記事を扱うポストを確保していたヘスは、こうして、一二月に同紙の特派員としてパリへ去るまでの約二ケ月間、マルクスと机を並べることになった。他にも二人は『ライン新聞』関係者で組織していた「月曜会」で顔を合わせている。[3]

(iii) 一八四三年一〇月末―四四年三月初め。一八四二年末から四三年初めにかけてプロイセン政府の出版物対策強化が急進的な新聞・雑誌に潰滅的な打撃を与える。マルクスとアルノルト・ルーゲは、この事態に対応するため国外で新しい雑誌を創刊する計画を進める。一八四三年七月末パリへ向う途中のルーゲはケルンに立ち寄り、丁度帰国していたヘスを計画に誘った。ヘスはルーゲと共にパリへ戻り、彼をフランスの社会主義者達に紹介している。[4] 一方マルクスは遅れて一〇月末にパリへ到着、以後翌年三月初めにヘスが再び帰国するまで、ドイツ人〝亡命者〟集団の一員として、また計画の雑誌『独仏年誌』の関係者としてヘスと交際している。[5]

(iv) 一八四五年九月初め―四六年三月。帰国したヘスは暫く著述に専心していたが、一八四五年に入ると、エンゲルスと組んで、エルバーフェルトでの共産主義についての講演会開催、『ゲゼルシャフツシュピーゲル』誌の創刊といった動きを見せる。しかし九月初め、当局の追及を恐れたヘスは再びドイツを離れ、マルクスらの移り住んでいたブリュッセルへと居を移す。[6] ブリュッセル時代のヘスは、『ドイツ・イデオロギー』の執筆に参加するなど、まだマルクスらと良好な関係を保っていた。しかし一八四六年三月にヘスがその地を去って間も無く、マルクスとヴァイトリングの争いが頂点に達し、この紛争に巻き込まれるという形でヘスとマルクスの関係にも罅が入る。

(v) 一八四七年八月末―四八年二月末。一八四七年初め、パリにいたヘスはマルクスらの動向に従って義人同盟に加入した。そして八月になると再びブリュッセルに現われて、同盟（この間に共産主義者同盟と改称）ブリュッセル班の一員としてマルクスらと行動を共にしている。一八四八年二月に革命が始まるとマルクスは一旦パリへ移った後帰国、ヘスも

ケルンへ戻るが、共同行動は続かない。同盟ケルン班内で活動方針を巡って紛争が始まると、ヘスは労働者協会を押えたゴットシャルク派に与して、マルクスらとの明確な対立関係に入る。

以上が前三月期に於けるヘスとマルクスの接触の跡である。彼らの交際は、このように一八四一年から四八年にかけて約七年間に及んでいる。しかし思想上の連関を問題にする場合、この七年間がすべて同じ水準で議論の対象となるわけではない。ヘスもマルクスもこの期間に何度か思想上の転換を行なっている。しかも両者の主な転換点は時期的にほぼ重なり合っていると言ってよい。これらの転換点を考慮するならば、両者の交流は三つの時期に区分することが出来る。即ち、出会いの年から『独仏年誌』への動きが始まる一八四三年後半までの第一の時期、続いて一八四三年後半のパリでの再会から一八四五年後半のブリュッセル時代に至る第二の時期、最後に一八四五年末から一八四八年の訣別までの第三の時期である。そして実は、その中で第一の時期と第三の時期については、両者の思想上の位置関係は比較的明瞭なのである。

先ず第一の時期については次のように言える。ヘスは一八三七年の処女作以来私的所有の廃止を展望する立場に立っており、『ライン新聞』紙上でも、政治的改革によっては社会問題を解決し得ないという趣旨の論陣を張っていた。[7] 一方マルクスはヘーゲル哲学の高みからヘスの論説を非哲学的・抽象的と評し、共産主義に対してもまだ批判的な立場を取っていた。[8] 『ライン新聞』グループ内でのヘスの立場を見誤って「月曜会」に於けるヘスの影響が取り上げられることもあるが、両者の、取り分けマルクスの姿勢は、むしろ逆にこの時期には両者の思想的交流がなかったことを推測させる。

また一八四五年末以後の第三の時期についても事態は明らかである。一八四五年後半エンゲルスとマルクスは〃唯物史観〃という新しい立場を固めつつ、ドイツ的社会主義の批判を開始した。ヘスも以前の考えを捨てて彼らに追随しようとする。[9] しかしエンゲルス、マルクスの側では更に〃真正社会主義〃批判を強化し、ヘスと彼らとの懸隔は次第に広がって遂には一八四八年の完全な決裂へと至る。[10]

本稿では、この二つの時期を直接対象とすることを避け、一八四三年後半から四五年の後半に至る第二の時期のヘスと

マルクスの関係に焦点を合わせることにする。

① 例えば Cornu と Mönke がヘス論文集に付した Einleitung が翻訳されている（『モーゼス・ヘスと初期マルクス』武井勇四郎訳、未来社、一九七二年）。

またヘスの作品の邦訳も、モーゼス・ヘス『初期社会主義論集』山中隆次、畑孝一訳、未来社、一九七〇年、良知力編『資料ドイツ初期社会主義。義人同盟とヘーゲル左派』、平凡社、一九七四年に収録されている。

なおヘスの生涯については、E. Silberner, *Moses Hess. Geschichte seines Lebens*, Leiden 1966 に詳しい。ヘスの全体像を扱った Isiah Berlin, *The Life and Opinions of Moses Hess*, Cambridge 1959 には邦訳（小池鉦訳「モーゼス・ヘスの生涯と意見」『みすず』第一五〇号、第一五三―一五四号、一九七二年三月、六月―七月）があるが、事実関係については不正確。

② マルクス回想の類にしばしば引用されている、「要するに君は、近々（著書でも講壇でも）公然と登場して、ドイツの目を引きつけるであろう最も偉大な、多分今生きている唯一の本来の哲学者と知り合いになれると期待していいのだ。彼はその傾向並びに哲学的素養の点でシュトラウスのみならずフォイエルバッハをも凌いでいる」云々という手紙のこと（Heß an Auerbach, 2. Sept. 1841, Moses Heß, *Briefwechsel*, hrsg. von E. Silberner, 's-Gravenhage 1959, S. 79 f.）。

③ 「月曜会」は「社会問題」を討論するために設けられた、と伝えているのは、J. Hansen (*Gustav von Mevissen. Ein rheinisches Lebensbild. 1815–1899*, Bd. 1, Berlin 1906, S. 264 f.) である。但し Hansen はゲオルク・ユングら『ライン新聞』の中心グループとヘスの立場の相違を見落していることに注意する必要がある。

④ A. Ruge, *Sämmtliche Werke*, Bd. 5, 2. Aufl., Mannheim 1848, S. 64.

⑤ 但し一八四三年一一月頃にはまだマルクスはヘスを敬遠していた節がある。Vgl. Marx an Fröbel, 21. Nov. 1843, *Karl Marx, Friedrich Engels, Werke*（以下 *MEW* と略記）Bd. 27, S. 423.

⑥ ブリュッセルの「小さなドイツ人コロニー」については、Vgl. J. Marx, Kurze Umrisse eines bewegten Lebens, *Mohr und General. Erinnerungen an Marx und Engels*, 3. Aufl., Berlin 1970, S. 204 f.

⑦ Die heilige Geschichte der Menschheit, Moses Heß, *Philosophische und sozialistische Schriften, 1837–1850*, hrsg. von A. Cornu und W. Mönke, Berlin 1961（以下 *HS* と略記）S. 53; Über eine in England bevorstehende Katastrophe, *HS*, S. 184 f., Die politischen Parteien in Deutschland, *HS*, S. 192.

⑧ Die Zentralisationsfrage, *Karl Marx, Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe*（以下 *MEGA* と略記）I, 1/1, S. 231; Der Kommunismus und die Augsburger „Allgemeine Zeitung", *MEW*, Bd. 1, S. 108.

⑨ „Vorwort" zu einer deutschen Bearbeitung von Buonarroti, W. Mönke, *Neue Quellen zur Hess-Forschung*, Berlin 1964, S. 84 f., 87.

⑩ 前三月期のヘスの活動と思想発展については、拙稿「三月前期のヘーゼス・ヘス」『史林』第五七巻第一号、一九七四年一月参照。

二

さて前節で設定した第二の時期の劈頭に当る一八四三年から四四年にかけての冬は、一般にマルクスが社会主義へ転じた時期とされている。[1] 先述のように、丁度その時、社会主義では先輩格のヘスが身近で活動していた。そこで彼がマルクスに何らかの影響を及ぼしたのではないかという疑問が出てくる。それだけではない。ヘスがこのパリ滞在期に「貨幣制について」と題する論文を執筆し、それを一旦は『独仏年誌』の編集部に手渡したことが分かっている。[2] マルクスがこの〝疎外論〟の展開されているヘス論文を目にしたことは明らかである。そこでヘスのマルクスへの影響という問題は、更に興味を引くものとなってくる。そして事実、ヘスと初期マルクスとの関係を扱っている研究者の関心はこの問題に集中しているのである。

ところでこの問題が検討されるに際して、その素材を提供しているのは、両者の次のような著作である。先ずヘスの側では、一八四三年七月に出版された『スイスからの二一ボーゲン』に収録されている「社会主義と共産主義」など三篇の論説と、一八四五年半ば『社会改革のためのライン年誌』に発表された「貨幣制について」が取り上げられている。『二一ボーゲン』の三篇の論説については、執筆されたのが一八四二年から四三年にかけての冬であり、[3] ヘス自身の思想発展に即して言えば一段階前の第一の時期に属しているという、一般には曖昧にされている事情もあるが、その発表時期やマルクスが確実に見ていることなどからして、取り上げること自体先ずは妥当であろう。一方の「貨幣制」については、執筆期など前述した通りである。これに対してマルクスの側では『独仏年誌』に掲載された二篇の論文と『経哲手稿』が取り上げられている。ヘスの論説「貨幣制について」の執筆時期が一八四三―四四年の冬へと一年程繰り上げられたのも、また長い間眠っていた『経哲手稿』が発表されて、初期マルクス研究そのものが新たな緒に就いたのも一九三〇年代の初めであるということもあるので、それ以前のものは一応措くことにして、両者のこれらの作品の位置付け方に従ってこれ

までのヘス－マルクス関係についての研究を分類すれば、以下のようになる。

(i) ヘスのマルクスへの影響を最大限に評価するもの。『二一ボーゲン』の三論文や「貨幣制」が『独仏年誌』から『経哲手稿』の時期のマルクスに強い影響を与えたとする。Silberner や McLellan の見解がこれに当る。[4] ヘスの影響を大きく見る点では Thier や広松渉氏の見解もこの項に入れることが出来よう。[5]

(ii) 逆にヘスの影響を最小限に見積もる意見。『二一ボーゲン』論文の限定された影響のみを認める。山中隆次氏、畑孝一氏の意見がこれである。[6] Mönke の意見も恐らくはこの項目に入る。[7]

(iii) 両者の中間に、『独仏年誌』の段階並びに『独仏年誌』から『経哲手稿』へ移る段階に於てマルクスが『二一ボーゲン』論文の、続いて「貨幣制」の影響を受けたとする Cornu の考えがある。[8] 「貨幣制」から『経哲手稿』への〃一定の影響〃を認める良知力氏も中間意見に属すると見てよいだろう。[9]

『二一ボーゲン』の三論文に於てヘスがドイツ哲学とフランス社会主義の媒介を試みていること、これがマルクスの印象に残ったであろうという点はどの見解も認めている。しかしそれ以上の一致はない。意見は先ず『二一ボーゲン』論文に於ける哲学と社会主義の媒介の具体的な成果、私的所有批判の内容が『経哲手稿』時代のマルクスにまで影響を及ぼしているか否かについて別れている（但し明確に否定しているのは畑氏のみ）。影響とは要するに受ける側の受容性の問題である。問題となる両者の考えの比較から明らかになる類似性は、高々影響の蓋然性を示すにすぎない。この意味で言えば、影響を受けた当人がそれを明言している場合、事は極めて単純である。マルクスは『経哲手稿』の序言の中で、国民経済学批判の「内容豊かで独創的な」著作としてヘスの『二一ボーゲン』論文を持ち上げた上、本文中でもかなり基本的な箇所でヘス論文の参照を求めている。[10] 確かに他方で『二一ボーゲン』論文に於けるヘスの私的所有批判とマルクスの『経哲手稿』の議論を引き比べて見ると、二つは同一水準にはない。しかしここから出てくる結論は、〃だからヘスの影響はない〃ではなく、〃にも拘らずマルクスは自分の議論をヘスの論文に読み込んで彼を評価していた〃ということである。

ヘス自身が「貨幣制」によって乗り越えてしまった『二一ボーゲン』論文と『経哲手稿』との連関を、マルクス自らの指示から窺える以上に立ち入って追究するまでもなく、『手稿』時代のマルクスが『二一ボーゲン』論文の私的所有批判の何程かを受け入れる姿勢であったことは明らかである。『二一ボーゲン』論文の問題は以上で一応片付く。しかし意見は更に「貨幣制」論文のマルクスへの影響についても大きく割れている。即ち、「貨幣制」から「ユダヤ人問題」への影響を認めるか否か、「貨幣制」から『経哲手稿』への影響を認めるか否か、この二つの問題がまだ残っている。

最初に「貨幣制」から「ユダヤ人問題」への影響という問題を取り上げよう。『二一ボーゲン』論文のヘスと「貨幣制」のヘスとの間には明らかな視座の転換があり、マルクスの『二一ボーゲン』論文に対する評価にも多分に読み込みという要素が混じっている。マルクスのヘス評価には一八四三年末以降のヘスとの接触によって触発されたという色合があると言える。また「貨幣制」と「ユダヤ人問題」には丁度一八四三年末から四四年初めのパリ時代が背景として絡まってくる。従ってこの二つの作品の連関を検討することは、そのまま実質的にはヘスによる影響の開始点と見做すべき時点での事態の解明という作業に繋がってゆく。さてこの問題をめぐっては、Silberner や McLellan らの最大限評価説と第(ii)の最小限評価説とが最も明白な形で対立している。「貨幣制」から「ユダヤ人問題」への影響を認める見解は、二つの論説の類似性を強調し、これをヘスのマルクスへの影響と見做す。McLellan などはマルクスがヘスの論文を写したとまで極言している。なるほど「貨幣は人間から疎外された人間の労働と存在との本質である」[11]というマルクスの考えと、「貨幣制」に於ける「貨幣は相互に疎外された人間の産物であり、外化された人間である」[12]というヘスの主張は同じであり、ヘスもマルクスも、フォイエルバッハが展開していた、神は人間の類的本質が対象化されたものであるという所論（いわゆる〝疎外論〟）を社会経済的領域へ適用しているという点で一致していると言える。そしてこれだけの類似性があれば、影響の可能性が話題に上るのは当然であろう。但しこの類似性だけで決定的な断を下すためには、ヘスとマルクスが作品による接触しか行なっていないこと、且つ両者の作品の発表（執筆）の順序が明確なこと、この条件が必要である。しかし

今問題にしている事例にはどちらの条件も欠如している。

先ず作品執筆の順序が明らかでない。肯定説では当然ヘスの「貨幣制」が「ユダヤ人問題」に先行すると想定しているが、確証はない。それどころか、ヘスが一八四五年の発表直前になって「貨幣制」に再び手を加えた可能性すら残っている。[13] しかし逆に最小限評価説が影響を否定する根拠として掲げている主張、マルクスがヘスの論説を見る前に「ユダヤ人問題」を完成していたという主張にも確たる証左はない。[14] 現状では二つの作品の最終的な執筆順序を確定できないのである。従って現在我々が目にするような形の「ユダヤ人問題」と「貨幣制」とを引き比べて、単に類似性を指摘するだけでは、ヘスの影響を結論することは出来ない。

更に作品上の接点のみで、身近な接触がなかったという条件も、当然一八四三年から四四年の冬の時期には欠けている。この条件を欠く場合、どちらの作品の著述が先かという問題の如何に拘らず、直接議論を交わした際の影響という可能性が残る。勿論この可能性が逆に作品の比較を助けることもある。但しそれは、一方が以前からの考えをそのまま維持し、他方が丁度思想の転換期に当っている場合である。残念ながらこの時期のヘスとマルクスにはこれは当て嵌らない。この時期確かにヘスは既に社会主義者であり、一方のマルクスは社会主義への転換を行ないつつあった。しかしここで問題になっているのは、その社会主義の理論的な基礎付け方、フォイエルバッハの教説の社会経済的領域への適用ということである。この点では、ヘスの場合も一八四三―四四年の冬が思想上の転換期になっている。

そもそもヘスには、理論と実践を対置し、理論をより広い人間の生活領域へ転用することでこの対立項を総合する、この点に自己の独自の立場を見出そうとする性向がある。既に青年時代の日記に始まる知性と心情との統一志向、[15] ドイツ哲学の最終成果であるヘーゲル哲学を「行為」へ媒介しようという『ヨーロッパ三頭政治』（一八四一）に於ける姿勢、[16] 下って『古い社会界に対する最後の審判』（一八五一）に於けるマルクスらドイツの社会主義者達は理論的には正しいが何も実行出来ないという非難、[17] 一八五五年以降自然科学の研究の際に見せた、社会についての学問とモレスコット、フォークト

らの自然哲学とを総合して自然現象と社会現象を同じ一つの生命法則の下に把握しようという態度[18]、こうした所にその性向は現われている。多少図式的になるが、ヘスにはその時々周囲で勢力のあった哲学を理論のところへ次々に入れ換えて社会主義の基礎付けを図る思考のパターンがあったと言えよう。このパターンに即して言えば、一八四一年から四三年半ばまでヘスが理論の項に挿入していたのは、総体としてのヘーゲル左派哲学である。この時期のヘスが専らブルーノ・バウアー、フィヒテの影響下にあったとする良知氏らの説があるけれども、フォイエルバッハの影響もはっきり確認することが出来る[19]。宗教・神学的意識の批判を本質とするヘーゲル左派哲学総体に理論的に依拠して、その批判の論理を、人間の意識に直接係わる領域以外へも拡大適用しようとしたのが、この時期のヘスの基本的姿勢であると見る方が妥当である[20]。しかし一八四三年末になると、フォイエルバッハの影響が他の青年ヘーゲル派のそれを圧倒し始める。ヘスの作品に「人間」(Mensch, menschlich, Menschheit)、「類」(Gattung)、「本質」(Wesen) といった言葉が頻出するようになるのもこの時期以後である。つまりヘスは一八四三年末の時期に依拠する理論をヘーゲル左派哲学一般から個別フォイエルバッハ哲学へ切り換えつつあったと言うことが出来る。

話は変るが、一八四二年一一月ルーゲ、ヘルヴェークとベルリンの〃自由人〃達とが衝突、これに端を発してヘーゲル左派の内部分裂が始まっている[21]。新聞の存亡を無視して激語を弄するベルリン〃自由人〃の態度に予てから不快を感じていたマルクスら『ライン新聞』のグループは、この争いに際してルーゲの側に付いた[22]。一八四二年末以降プロイセン政府の締め付けにより反政府派新聞が次々と潰滅、一八四三年一月にはルーゲの『ドイツ年誌』が、四月には『ライン新聞』が犠牲となる。前述のようにこの状況を脱するため、ルーゲとマルクスは連繋を更に強化し、国外で雑誌を出版する計画を進める。この事業は、ルーゲのグループと『ライン新聞』グループとの同盟に、ケーニヒスベルクのヨハン・ヤコビのグループ等が絡むという性格になる手筈であった[23]。こうした戦線再編成の動きの中で、ヘーゲル左派の雄と目されていたブルーノ・バウアーは〃自由人〃を擁護する立場を取る[24]。彼とルーゲ、マルクスらとの距離は次第に開いてゆく。それに

つれてルーゲ、マルクスにとって、哲学者としてバウアーに勝るとも劣らぬ声望を持っていたフォイエルバッハを獲得すること、このことの意義が大きくなってゆく。丁度『アネクドータ』（一八四三年三月出版）収録の「哲学改革のための暫定的命題」によってフォイエルバッハが新たな注目を浴び始めていただけに尚更である。孤高の哲学者フォイエルバッハにルーゲとマルクスは再三計画への参加を要請している。[25] 以上のように一八四二年末から四三年の時期に、青年ヘーゲル派はバウアーや〃自由人〃らのベルリン・グループと、フォイエルバッハを担ぎ出そうとするルーゲ、マルクスらのグループに分裂したのである。

前述したヘスのヘーゲル左派哲学一般からフォイエルバッハへの乗り換えが時期的にこのようなヘーゲル左派二極分解の動きの後を追う形になっていることは改めて指摘するまでもあるまい。恐らくヘスは周囲の動向に刺激されてフォイエルバッハへの方向転換を行なったのであろう。またヘスがルーゲによって新しい雑誌に誘われていた頃、クロイツナハに屏居したマルクスは既にフォイエルバッハの「主語と述語の顚倒」という論理を駆使して『ヘーゲル国法論批判』に取り掛っていたという事実もある。[26] 個別フォイエルバッハ哲学の適用という点に関するヘスのプリオリテートは如何なる意味でも存在しない。しかしこの事からマルクスの側からの影響を云々するのは早計である。既に繰り返しているように、ヘスは一〇月末にマルクスと再会する以前からルーゲとの接触を通じて出版計画に関与していた。とすれば夙にその段階で、ヘスはヘーゲル左派分解の事情に通じており、フォイエルバッハへの方向転換を開始していたと考えるのが自然である。そして実際に一〇月の時点に於て既にフォイエルバッハへの傾斜が見られるのである。[27] 以上のように、ヘスとマルクスはそれぞれ、パリで交流を再開する以前に、係わりの深さは別としても、ヘーゲル左派解体の流れに掉さすことによって、フォイエルバッハの理論を宗教以外の局面へ適用する道を辿り始めていたと言える。彼の〃疎外論〃を社会経済的領域へ応用して、神と貨幣を類比することは、この道の延長線上にある。数歩を進めて〃貨幣は外化された人間本質である〃という命題に到達することは、ヘスにもマルクスにも困難ではなかった筈である。逆に言えばどちらが先にこの命題

に到達したかを確定することは難しい。影響については言わずもがな。

以上のように「貨幣制」と「ユダヤ人問題」の二つの著作の執筆順序は不明確であり、またその不明確さを作品の背景を探る方法によって補正することも出来ない。ヘスの「貨幣制」が「ユダヤ人問題」に影響を与えたことを積極的に指示する材料は何もない。こうしてヘスの圧倒的な影響を主張する第(i)の最大限評価説は、影響の始まったと見られるまさにその時点に於て影響を確定出来ない仕儀となり、重要な論拠を一つ失なうことになる。

① マルクスは既に一八四三年の夏には共産主義者であったという説もあるが、無理が多い。当時最もマルクスと親しかったルーゲが証言しているように、一八四三／四四年の冬とする方が妥当であろう。Ruge, a. a. O., S. 139 f. Vgl. A. Ruge, *Briefwechsel und Tagebuchblätter aus den Jahren 1825–1880*, hrsg. von P. Nerrlich, Bd. 1, Berlin 1886, S. 341, 359.

② J. P. Mayer, Dottore Graziano oder Doktor Arnold Ruge in Paris. Aus dem handschriftlichen Nachlaß von M. Heß, *Die Gesellschaft*, Jg. 8, 1931, S. 178.

③ Silberner, a. a. O., S. 124.

④ Silberner, a. a. O., S. 144, 191 f.; D. McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, London 1969, pp. 151–158. McLellan は『三頭政治』の影響をえ明言している。*Ibid.*, p. 142 f.

⑤ E. Thier, *Das Menschenbild des jungen Marx*, Göttingen 1957, S. 43–61. 広松渉「初期マルクス像の批判的再構成」『思想』、一九六七年一〇月、頁二二—四六。

⑥ 山中隆次「ヘスとマルクス——経済的疎外を中心として——」『経済理論』第六二号、一九六一年七月、頁二九—五〇、第六三号、一九六一年九月、頁三三—五八、山中隆次「ヘスとマルクス——ドイツ古典哲学とフランス社会主義の結合を中心として——」『「資本論」の成立』岩波書店、一九六七年、頁一五七—一八〇、山中隆次『初期マルクスの思想形成』、新評論、一九七二年、頁一七八—一八四。畑孝一「モーゼス・ヘスにおける人間の自己疎外の把握について——ヘスとマルクスとの関係に関する考察——」『一橋論叢』第四六巻一号、一九六一年、頁六五—七四、畑孝一「解説——ヘスとマルクス」『初期社会主義論集』、頁一八三—二〇八。

⑦ Mönke はヘス論文集編集の段階では Cornu と意見を同じくしていたが、その後、マルクスの方がヘスの〝疎外論〟に影響を及ぼしたという考えに転じた。Mönke, a. a. O., S. 19 f., Anm. 5.

⑧ A. Cornu, *Moses Hess et la Gauche Hégélienne*, Paris 1934, p. 82, 84 f. 93–108, A. Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels. Leben und Werk*, Bd. 1, Berlin 1953, S. 378, 436, 439, 516, 523, 546.

⑨ 良知力「ヘスは若きマルクスの発展の座標軸たりうるか——広松渉氏の初期マルクス論によせて——」『思想』、一九六九年五月、頁六五四—六六八。

⑩ *MEGA*, I, Bd. 3, S. 33 f., 118. マルクスが参照を求めているのは、Philosophie der Tat, *HS*, S. 224 f. と推定されている。

⑪ Zur Judenfrage, *MEW*, Bd. 1, S. 375. Siehe auch S. 376 f.

⑫ Über das Geldwesen, *HS*, S. 335. Siehe auch S. 334 f.

⑬ ヘス自身が言っているように、『独仏年誌』編集部に手渡されたの

は、「貧困制」原稿の「大部分」であって、すべてではない。Mayer, a. a. O., S. 178.

⑭ *MEGA*, I, Bd. 1/1 の Einleitung (S. LXXX) も、「ユダヤ人問題」がクロイツナハで書き始められ、ベリで完成されたとしているのみ。

⑮ Silberner, a. a. O., S. 21 f.

⑯ Die europäische Triarchie, *HS*, S. 78–89.

⑰ *Dokumente des Sozialismus*, hrsg. von E. Bernstein, Bd. 1, 1902, Nachdruck, 1968, S. 540.

⑱ Silberner, a. a. O., S. 335–344.

⑲ Deutschland und Frankreich in Bezug auf die Centralisationsfrage, *HS*, S. 176, etc.

⑳ こう位置付ける方が、勿論バスの主観的意図にも見合っている。Vgl. Philosophie der Tat, *HS*, S. 212 ff.

なおフォイエルバッハとブルーノ・バウアーを同じ宗教批判者として一括することはそれほど困難なことではない。ニュアンスの違いはあるがバウアーも一種の〝疎外論〟を展開している。B. Bauer, *Die gute Sache der Freiheit und meine eigene Angelegenheit*, Zürich 1842, Nachdruck, 1972, S. 16, 39 f., 208.

㉑ ヘーゲル左派の分解については、Vgl. G. Mayer, Die Anfänge des politischen Radikalismus in vormärzlichen Preußen, *Zeitschrift für Politik* Bd. 6, 1913, S. 68–75.

㉒ Vgl. Marx an Ruge, 30. Nov. 1842, *MEGA*, I, Bd. 1/2, S. 285 ff., Ruge an Marx, 4. Dez. 1842, ebenda, S. 287 ff.

㉓ 一八四三年夏には、国外で株式による出版社を設立し、その出版社が雑誌を出す計画になっていた。そして、実際にケルンやケーニヒスベルクのグループに資金提供を求める働きかけがあった。しかし結局ルーゲが出資者としてフランクフルトの出版社に加わるだけに終った。Vgl. Ruge an Marx, 4–7. Juni 1843, ebenda, S. 310 ; O. Camphausen an L. Camphausen, 18. Aug. 1843, *Rheinische Briefe und Akten zur Geschichte der politischen Bewegung. 1830–1850*, hrsg. von J. Hansen, Bd. 1, Essen 1919, Nachdruck, 1967, S. 587 u. Anm. 2, E. Silberner, Johann Jacoby 1843–1846, *International Review of Social History*, Vol. 14, 1969, S. 364 f.; Ruge an Fleischer, 30. Mai 1844, Ruge, *Briefwechsel*, S. 352.

㉔ Vgl. Bauer an Marx, 13. Dez. 1842, *MEGA*, I, Bd. 1/2, S. 292. 当初バウアーは〝自由人〟道とは一線を画していたが、ルーゲと〝自由人〟の争いに際しては後者に付いた。バウアーが〝自由人〟の頭目になったかどうかは不明。ルーゲは一八四三年に入ってもバウアーを新しい雑誌に加えたがっていた。

㉕ 一八四三年七月二二日、ベリへ赴く途中のルーゲがフォイエルバッハを訪問し、マルクスも一〇月三日付で寄稿を求める手紙を出している。しかしフォイエルバッハは兄の死などを口実に寄稿の確約を与えなかった。Vgl. Feuerbach an Ruge, 2. Juni 1843, Ruge, *Briefwechsel*, S. 309, Ruge an seine Gattin 24. Juli 1843, ebenda, S. 316, Marx an Feuerbach, 3. Okt. 1843, *MEW*, Bd. 27, S. 419 ff.; Feuerbach an Marx, 25. Okt. 1843, *MEGA*, I, Bd. 1/2, S. 319 f.

㉖ マルクスは『アネクドータ』を手に入れるとすぐフォイエルバッハの「哲学改革のための暫定的命題」を読み、政治について語るとこう少ないのだけが不満であるとの感想をルーゲに書き送っている。Marx an Ruge, 13. März 1843, *MEW*, Bd. 27, S. 417. そして〝主語と述語を入れ換える〟というフォイエルバッハの指示に従って、自らヘーゲル法哲学の批判に着手した。Vgl. Kritik des Hegelschen Staatsrechts, *MEW*, Bd. 1, S. 206, 209, 210, 215 f., 224, 287, etc.

㉗ Die Preisfrage in Betreff des Nationalhasses, *HS*, S. 251. これは一〇月一四日付の『ケルン新聞』の記事で、「パリ発一〇月一〇日」とある。

三

「貨幣制」から「ユダヤ人問題」への影響を確定することは出来ない。だからといって「貨幣制」の「ユダヤ人問題」や『経哲手稿』への影響を否定する説、第(ii)の最小限評価説や『独仏年誌』から『経哲手稿』へ移行する段階までは影響を認めるものの『手稿』そのものへの影響は否定してしまう Cornu の見解が自動的に承認されるわけではない。これらの見解が「貨幣制」と「ユダヤ人問題」との連関を否定する際の執筆順序という論拠については前節で論じた通りである。一方『経哲手稿』との関係についてはどうか。山中氏らの言葉で言えば「貨幣制」が〝小商品生産者社会〟の批判であるのに対して『経哲手稿』は〝資本制社会〟の批判を展開しているということ、二つの作品の思想水準が決定的に相違している点が否定説の根拠となっている。つまりマルクスは『経哲手稿』によってヘスの水準を大きく越えてしまい、もはやヘスの影響を受ける余地はないというわけである。果してそうだろうか。以下マルクスは『経哲手稿』でヘスを乗り越えたか、一八四四年から四五年初めにかけてヘスとマルクスの思想水準は決定的に違っているのか、という形に視野を拡大して、「貨幣制」と『経哲手稿』の問題を検討しよう。但しこの視野の拡大によってヘスの側では「貨幣制」以後一八四五年前半に至るまでの諸論文が、マルクスの側では『聖家族』が併せて議論の対象となる。最小限評価説でも Cornu の見解でもこの時期のヘスには「貨幣制について」以上の水準を示す論説はないとされている様子だから、この手続きに不都合はない筈である。

先ずヘスとマルクスの類似点を整理することから始めよう。「貨幣制」や『経哲手稿』を勿論含めて一八四四年から四五年初めにかけての両者の著作は、市民社会批判の視点に関して、次のような顕著な類似を示している。

(i)　第一に両者とも私的所有が支配する社会の状況を批判するための理論的基礎をフォイエルバッハの宗教批判の論理に求めるという基本的姿勢を取る。

ヘスは次のように言っている。「青年ヘーゲル主義はすべてを批判したが、己の批判だけは行なわなかった。〔……〕それはまだ本質的にはヘーゲル的大地の上に止まっていた。フォイエルバッハが遂に青年ヘーゲル主義の足許からその大地を取り去った。」「フォイエルバッハは最も完成された宗教、即ちキリスト教の客観的本質が人間の外化された本質であることを証明しており、この批判一つによってあらゆる理論的な誤謬つまり矛盾の基礎を破壊した。」「フォイエルバッハ的見地から、実践的な神たる貨幣に対しても、理論的な神に対するのと同様の批判的態度を取りさえすれば、〔……〕小商人世界を分解し、プルードンよりはずっと単純な推論によって、現存の所有がその見掛けとは、所有の真のあり方とは正反対のものであるという彼と同じ命題に達することが出来る。[1]」

ヘスのこれらの発言に対応するかのようにマルクスの方も次のような評価をする。ヘーゲル弁証法に対して批判的な態度を取らなかった青年ヘーゲル派とは異って、フォイエルバッハは「旧哲学の真の克服者」であり、「実証的批判一般、従ってまた国民経済学のドイツに於ける実証的批判は、その真の基礎付けをフォイエルバッハの諸発見に負っている[2]」と。

神学と偽装せる神学たる旧哲学との破壊者フォイエルバッハに私的所有批判の論拠を求めるというこの基本姿勢からは、次のような市民社会（ヘスは「小商人世界」Krämerwelt とも呼んでいる）批判の論点が出てくる。

(ii)　両者とも市民社会をキリスト教或はその原初形態としてのユダヤ教の実践・実現と把握する。逆にキリスト教は市民社会の理論的・精神的表現と見做される。

ヘスは主張する。「キリスト教は利己主義の理論、論理学である。これに対して利己主義の実践の古典的土壌は現代のキリスト教的小商人世界である。」「キリスト教は近代小商人世界で実現されている。[3]」

一方マルクスも「実践的ユダヤ精神は完成されたキリスト教的世界の中ではじめて完成の域に達する、そうだキリスト

教的世界の完成された実践そのものである」「我々はユダヤ教の強靱な生命を市民社会の実践的要素から説明した。そして市民社会はかの宗教に空想的に反映されているのである。[4]」という点を「ユダヤ人問題」に引き続き確認している。

(iii) キリスト教と市民社会を類比すれば、神と貨幣の類比は当然であろう。勿論批判の視点は〃疎外論〃である。ヘス。「顚倒した世界の理論的生活にとって神に当るのは、その実践的生活にとっては貨幣である。即ち貨幣は人間の外化された能力であり、商取り引きされる生命活動である。」「貨幣は相互に疎外された人間の産物、外化された人間である。[5]」

この点でもマルクスは「貨幣は人類の外化された能力である[6]」と述べて「ユダヤ人問題」以来の考え方を崩していない。

(iv) 人間が自己の能力・本質を貨幣或はそれに類した疎遠な物へと外化している市民社会に於ては、本質に見合った人間生活を送ることは出来ない。例えば

(α) 類と個は分断され、両項の関係は顚倒する。ヘスが「個は目的に引き上げられ、類は手段に貶められている[7]」点を非難すれば、マルクスも「疎外された労働は類的生活を個人的生活の手段たらしめる[8]」と批判する。

(β) 自由な人間的活動が妨害される。ヘスは言う。「今日我々は全き人間的本性に従った活動が出来るか、即ち人間的生命を享受出来るか?——決して出来ない。現代の社会では殆どすべての活動が人間本性の内的な刺激によるのではなく、労働意欲・労働への愛によるのではなく、外的刺激によって、大方は困窮のため貨幣のために行なわれている。[9]」一方マルクスも「私の労働は自由な生命の表出、従って生命の享受である筈だ。私的所有を前提すれば、私の労働は生命の外化である。何故なら、私は生きるために、生活手段を調達するために労働するのだから。この場合私の労働は生活ではない」と考えている。[10]

(v) 類的本質・本来あるべき人間的絆の失なわれた市民社会に於て人々を結び付けるのは利己主義でしかないこともまた必然である。

ヘスが「近代小商人世界に原理的に貫徹されている利己主義」「競争の本質たる利己主義」について多言を費している[11]ばかりではない。マルクスもまた「市民社会の利己主義的個人」について語っている[12]。

(vi) 人間の活動が自己の本質に従って内発的に行なわれず、お互の利己心という外的強制によって行なわれる状態、それは人間相互の奴隷化ではなかろうか。ヘスにもマルクスにも〃市民社会＝普遍的奴隷制論〃とでも言うべき議論が見られる。

ヘス。「我々の許では奴隷制はもはや一方的ではない。相互的だ。私が君を奴隷にするだけではない。君も私を奴隷にする。〔……〕お互いに自由のための、生活のための手段を奪い合うことによって。」「一度商品化の原理が確立されるや、普遍的奴隷制、即ち今日の小商人の、一般的な、相互の、自由意志による人身売買の道が切り開かれた[13]。」

マルクス。「古代国家が奴隷制をその自然の土台としたように、近代国家は、市民社会と市民社会の人間、即ち私的利害と無意識の自然必然性という絆によってのみ人間と結ばれているにすぎない独立した人間、営利活動と自分自身並びに他人の私的欲求の奴隷とを自然の土台にしている。」「近代世界では、各人は奴隷制の一員であると同時に共同体の一員である。市民社会の奴隷制は、外見的には最大の自由である[14]。」

以上のように、〃人間の自己疎外〃という議論を中心にしたヘスとマルクスの市民社会像は相当な重なりを示している。確かに両者の間に相違はある。マルクスが類的本質・類的機能の外化、自己疎外を強調するのに対して、当初からフォイエルバッハに一定の距離を取り、類的本質・類的機能を「諸個人の協働」と読み換えている[15]ヘスは、協働（Zusammenwirken）・交通（Verkehr）の阻害、社会的繋りの欠如という面を強調する。マルクスが飽く迄も「国家と市民社会」という二元構造を前提した上で市民社会を議論するのに対して、ヘスには元々「国家と市民社会」という問題意識が希薄である[16]。等々。しかしこれらの相違は両者の市民社会像の基本的対応を崩してはいない。

差異は更にヘスとマルクスがこの市民社会像を展開してゆく上での道具立てにもある。「自然史」には二つの時期、有

機体の諸々の構成要素が衝突、「闘争」を繰り返す中で、その有機体の本質が形成されてくる「発生史」の時期と、形成された有機体の本質が調和的に展開してゆく時期とがある。社会的有機体である人類の歴史にもこの区別は当て嵌る。人類は今、敵対的な「発生史」から調和的な「発展史」への過渡期に差し掛っている。人々の動物的な闘争は今極点に達しているが、有機的・調和的時代は眼の前である。[17] ヘスの方はこういった自然史と人類の歴史のアナロジーを市民社会論に絡めてくるにすぎない。一方のマルクスは、既にこの時期には、ヘスとは違って深く経済学に足を踏み入れていた。多くの経済学上の知識を材料として抱えていた。

しかしこの相違は両者の思想水準、市民社会批判の視座の違いを意味しない。「私的所有の状態を人間的・理性的状態として受け入れる国民経済学は、その基本前提たる私的所有と絶えざる矛盾に陥っている。宗教的表象を絶えず人間的に解釈し、まさにそのことによって宗教の超人間性という基本前提と絶えず衝突している神学者の矛盾と類比さるべき矛盾に。」[18] マルクスの国民経済学批判の基本線はここにある。国民経済学は、営利以外の繋りを持たない私的所有者の集合体である市民社会を対象とし、私的所有の運動を記述している。[19] しかし私的所有を扱っていることに無自覚・無批判な国民経済学は、自ら記述している事柄の本質的連関を理解していない。そこでマルクスが、国民経済学の諸範疇、諸法則の一切を、私的所有の展開という形で一貫して把握して見せようというわけである。[20] それによって、一方では経済学の自家撞着は解消されるであろう。しかし他方では国民経済学が無条件に前提している私的所有の、そして国民経済学の描いている市民社会の非人間性が露わになるであろう。マルクスは経済学それ自体や私的所有が〝資本主義的〟か否かといった穿鑿に興味があるのではない。彼の関心は明らかに、私的所有による〝人間の自己疎外〟という市民社会像を国民経済学の提供する素材を使って〝実証〟することにある。フォイエルバッハが神学そのものから素材を取って〝実証的に〟神学の矛盾を発いて見せたように。このような関心のあり方は勿論具体的な議論の展開をも規定している。例えば「疎外された労働」についての議論である。ここでマルクスは労働者と生産手段の分離を事実として知っていることを示している。し

かし後の時代のように資本の論理に内在してその意味を追究してはいない。その分離は、この時期のマルクスにとっては「国民経済学上の事実、労働者と彼の生産との疎隔」の一事例でしかない。[21] それだけではない。マルクスがこの「国民経済学上の事実」に与えている「疎外された労働」という概念そのものの中にも彼の関心の方向性が見える。国民経済学に於ては資本、土地と並ぶ一カテゴリーにすぎないとされている労働が、実は「疎外された労働」として、「私的所有の主体的本質」、私的所有を生み出す原動力である、このように捉え返すことがマルクスの国民経済学批判の出発点になっている。[22] 即ち、「疎外された労働」自体の規定に言い換えるならば、「労働」は、私的所有の圏内では、自由な人間的活動に類比さるべき主体的原理であるが、まさに私的所有の圏内にあること自体によって「疎外」されている、この点をマルクスは出発点にしようというのである。「疎外された労働」の反対概念は、普通考えられているように〃疎外されない労働〃ではなく、〃自由な人間的活動〃なのである。マルクス曰く「労働は外化の内部での人間的活動の一表現にすぎない。[23]」このような「労働」の把握に〃類的存在としての人間が実現されている世界〃から〃私的所有の世界〃への直接的・道義的断罪の姿勢を見ることは無理だろうか。少くとも、この時期のマルクスはまだ、労働が〃疎外〃される過程を歴史的・経済的脈絡の中で解明して見せては呉れない。このように、一八四四年から四五年初めにかけての時点では、マルクスが〃人間の自己疎外〃の状態である市民社会という視点を振り捨てて、経済学の内在的批判を貫徹しているとはまだ認めがたいのである。[24]

ヘスとマルクスの市民社会批判の視座そのもの、市民社会像そのものには、これまで見て来たように、大きな相違はない。従って「貨幣制」から『経哲手稿』への影響を否定する見解が挙げている、思想水準の相違という論拠、『経哲手稿』のマルクスは既にヘスの水準を乗り越えているという論拠は維持できない。勿論ヘスとマルクスの議論に大きな類似性が見られるからといって、それをすべてヘスの影響に帰す必要はない。両者がフォイエルバッハを援用しているという一事から偶然出て来る一致もあろう。しかも前節で示したように、その社会経済的領域へのフォイエルバッハ応用が始まった

一八四三年末から四四年初めの時点に於けるくスの影響を確証出来ないのが現状である。しかしそれでもなお、フォイエルバッハ評価から市民社会像に到る両者の類似は、くスが（勿論逆にマルクスがの可能性もある）相手に影響を与えた可能性のあることを示している、とは言い得るのである。

㊶ Über die sozialistische Bewegung in Deutschland, *HS*, S. 292, 292 f., 293.

㊷ Ökonomisch-philosophische Manuskripte, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 34, 151. Siehe auch S. 152.

㊸ Über das Geldwesen, *HS*, S. 334, 338. Siehe auch S. 336 f., 337, 338 f., 345.

㊹ Die heilige Familie, *MEW*, Bd. 2, S. 116. Vgl. Zur Judenfrage, *MEW*, Bd. 1, S. 376 f.

㊺ Über das Geldwesen, *HS*, S. 334 f., 335. Siehe auch S. 339, Über die sozialistische Bewegung, *HS*, S. 293, Über die Noth unserer Gesellschaft und deren Abhülfe, *HS*, S. 314, 318, 324, Die letzten Philosophen, *HS*, S. 385, 388, etc.

㊻ Ökononisch-philosophische Manuskripte, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 148, Siehe auch Aus dem Exzerptheften, ebenda, S. 531, 540.

㊼ Über das Geldwesen, *HS*, S. 333 f. Siehe auch Über die Noth unserer Gesellschaft, *HS*, S. 315, Die letzten Philosophen, *HS*, S. 383.

㊽ Ökonomisch-philosophische Manuskripte, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 87 f. Siehe auch S. 89.

㊾ Kommunistisches Bekenntniß in Fragen und Antworten, *HS*, S. 360. Siehe auch Bestimmung des Menschen, *HS*, S. 275, Fortschritt und Entwicklung, *HS*, S. 284, Über die Noth unserer Gesellschaft, *HS*, S. 325, etc.

㊿ Aus den Exzerptheften, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 547. Siehe auch S. 543 ff.

(51) Über das Geldwesen, *HS*, S. 334, 339, Über die Noth unserer Gesellschaft, *HS*, S. 313, Zwei Reden über Kommunismus, *HS*, S. 350, Die letzten Philosophen, *HS*, S. 388, etc.

(52) Die heilige Familie, *MEW*, Bd. 2, S. 127 f. Siehe anch Aus den Exzerptheften, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 543 ff.

(53) Über das Geldwesen, *HS*, S. 337, 342. Siehe auch S. 333, 335, 336, 341 f., 344, Zwei Reden, *HS*, S. 350, Kommunistisches Bekenntniß, *HS*, 361 f., etc.

(54) Die heilige Familie, *MEW*, Bd. 2, S. 120, 123.

(55) Über die sozialistische Bewegung, *HS*, S. 287, 294.

(56) くスが「国家と市民社会」というテーマを知らなかったということではない。Vgl. Sozialismus und Kommunismus, *HS*, S. 207. しかしくスにあってはこのテーマは思考の枠組を規定していない。また『産業の哲学者達』で再びこのテーマが取り上げられる時には、マルクスの「ユダヤ人問題」の影響が見られる。Vgl. Die letzten Philosophen, *HS*, 383.

(57) Bestimmung des Menschen, *HS*, S. 276 f., Fortschritt und Entwicklung, *HS*, S. 281 f., Über das Geldwesen, *HS*, S. 331 f., Zwei Reden, *HS*, 349 f., Die letzten Philosophen, *HS*, S. 387, etc.

⑱ Die heilige Familie, *MEW*, Bd. 2, S. 33.

⑲ Vgl. Ökonomisch-philosophische Manuskripte, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 81, 138 f., Aus den Exzerpttheft, ebenda, S. 537.

⑳ Vgl. Ökonomisch-philosophische Manuskripte, ebenda, S. 81 f., 93, Die heilige Familie, *MEW*, Bd. 2, S. 32 ff.

㉑ Ökonomisch-philosophische Manuskripte, MEGA, I, Bd. 3, S. 82–90.

㉒ Ebenda, S. 91 f., 97, 98 f., 108 ff., 111, 138, etc.

㉓ Ebenda, S. 139. Siehe auch S. 99, 121, 156, 157.

㉔ 一八五〇年代にマルクスの経済学研究が本格的に再開された時、人間が自己の本質を疎外している状態が市民社会であるという考えは、『ドイツ・イデオロギー』でのフォイエルバッハ＝人間主義批判によって、既に崩れ去っていた。なるほど一八五〇年代のマルクスもなお「疎外」「外化」について語っている。*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, Berlin 1953, S. 78, 414, 715 f., etc. しかしこでの「疎外」「外化」はもはや、「人間」「類的存在」という主体概念を指向してはいない。

四

一八四四年から四五年初めにかけての時期には、市民社会批判の視座に関して、ヘスとマルクスの間に大きな隔たりはない、前節ではこのことを明らかにし、互いに相手の見解から影響を受けた可能性のあることを確認した。しかし両者の考え方の類似性は、それ以上の作業を、この類似を当時の思想情況の中へ位置付けることを要請している。

この国に於ては、ヘスの存在は専らマルクスへの影響の有無という形で問題にされてきた。しかし、一九三〇年代にヘスの論説「貨幣制について」の執筆時期が繰り上げられる以前に論争の的になっていたのは、ヘスとマルクスが一時的にであれ同じ潮流に、即ち〝哲学的社会主義〟（或はエンゲルスの言葉を使えば〝真正社会主義〟）に属していたのではないかという点である。一方で、シュトルーヴェに始まる肯定論が、ヘスとマルクスの論文に見られる語句の類似を拾い上げて、マルクスは〝真正社会主義者〟であったと言い立てれば、他方これを否定する論者は、革命原理、唯物弁証法を体現しているマルクスが〝反動的〟な〝真正社会主義者〟であるはずがないという議論を振り翳して反論を加えていた。[1] しかし『経哲手稿』等の重要資料が未発掘の状態では、無論ヘスとマルクスとの接近と離反の過程の解明や両者の類似点

の構造的な分析を行なうべくもない。問題は決着を見ないまま、一九三〇年代以後、一八四三年から四四年にかけての冬に於けるヘスの影響という点に重心が移ってしまった。しかし思想の位置付けの問題が影響の問題に完全に吸収されてしまうことはあり得ない。別途に、マルクスがヘスと Gesinnungsgenossen の関係にあったか否かを検討しなければならぬ所以である。

尤もそれは古い論争をそのまま蒸し返すということではない。〃真正社会主義〃とは元々一八四六年以降のエンゲルスが自分とは立場を異にするドイツ社会主義の諸傾向に投げ掛けた蔑称である。[2] この意味では、〃真正社会主義〃はエンゲルスがそれを歓迎しない諸傾向という以上の積極的な内容を持つものではない。また〃真正社会主義〃をより広義に、当時のドイツに広まっていた〃哲学的社会主義〃とでも言うべき傾向の別称と解した場合にも、〃真正社会主義〃は一つの確固たる教説、System などではない。〃哲学的社会主義〃は、思想の面から見る限り、文字通り、世に優れたるドイツ哲学、別けてもフォイエルバッハの人間主義によって社会主義・共産主義を基礎付けようという傾向を言うにすぎない。旧来の論争のように、〃真正社会主義〃がヘス或はカール・グリューンを創始者とする一つのともかくも纒まった思想体系であって、この体系に照して〃真正社会主義〃か否かを判定することが出来るという仮定の上に立って、マルクスは〃真正社会主義者〃か否かを争うのは、そもそも前提からして無理があると言わざるを得ない。アプローチの仕方は別にある。思潮・人脈の移り行きを考慮に入れることである。〃哲学的社会主義〃(或はそう呼びたければ〃真正社会主義〃。勿論当時呼ばれていたように「共産主義」「社会主義」「人間主義」等[3]と呼んでもよい)は、先述のように、思想的に言えばフォイエルバッハの人間主義による社会主義の基礎付けという一般的な傾向でしかない。しかしこの傾向にはその中心的な担い手となった集団が存在するのである。ヘスとマルクスが〃哲学的社会主義〃に共に属していたかという問題は、両者の考えが過不足なく対応しているかどうかではなく、両者の考えが一般的な思潮の傾向に沿って或る程度の一致を示しているか、人脈的に担い手集団の中にいるか、当然あるはずの考えの違いが自覚的に主義の相違として顕在化していな

いかどうかという問題なのである。

ヘスとマルクスの考えが著しい類似を示していることは前節で見た通りである。両者とも、フォイエルバッハの宗教批判の論理によって私的所有批判、市民社会批判を基礎付けようと試みており、両者の市民社会像は相当な重なりを示していた。勿論それはまた〃哲学的社会主義〃の一般的傾向にも合致している。そもそも本稿ではこの両者の類似性が他の二点の検討を要請したのであるが、先ずはこの類似を再度確認した上で、周囲の思潮の流れという点に目を移すことにしよう。

ヘスとマルクスの思想的・人脈的環境をなすライン州を中心とした反政府派の流れは次のような様相を示している。一八四二―四三年の『ライン新聞』には、カトリック系を除いて、プロイセン政府の〃官僚的専制〃に反対する様々な潮流が関与していた。[4] ケルンの若い法律家グループが、新聞社の理事、監査役会を占め、多くの企業家が株主として名を連ねている。そして編集部・寄稿家陣に於ては青年ヘーゲル主義が主流を形成する。こうした配置を可能にしていたのは人脈的繋りや、諸党派の未分化という情況であった。社会主義的傾向のヘスが、半面で青年ヘーゲル主義を受け入れる。法律家グループの中心で、実質的にも新聞社の定款の上でも新聞を牛耳っていた理事、一八四八年にはベルリンで民主派議員として名を上げるゲオルク・ユングが熱心に青年ヘーゲル主義の導入を図る。その青年ヘーゲル主義が自由主義とは異なった原理に立っているという意識は、当の担い手達にも周囲の者にも殆どない。青年ヘーゲル派の急進主義は、自由主義の貫徹、〃超自由主義〃にすぎないと見做されていた。[5] そこで経済問題に重点を置くことを望んでいたもう一人の理事オッペンハイムやカンプハウゼンに近い監査役のクレッセンらも、ユングの方針に敢えて抵抗を示さない。カンプハウゼン当人やメヴィッセンら後の自由派の頭目さえ一貫して新聞を支援している。役職員に寄稿者、株主の一部を加えた『ライン新聞』グループは、このように様々な傾向を内包しつつも、ライン州反政府派の中心をなす一つの集団を形成していた。ところが、一八四二年末のベルリン青年ヘーゲル派との縁切り以前は勿論、それ以後も維持された『ライン新聞』紙上の

急進主義それ自体が、自由派のこの集団からの分離を促進した。『ライン新聞』発禁処分を取り消すよう求めた請願運動が、自由派と他の傾向の人々との最後の公然たる共同行動となる。以後自由派はカンプハウゼンの州議会出馬に見られるように〃現実〃政治に関心を移し、一方徐々に自由派の離脱した残余集団は内輪に繋りを維持しつつ左傾化する。このような二極分化の傾向は、一八四四年一一月一〇日「労働階級福祉協会」のケルン支部を設立するため開催された集会に於て表面化した。会場の意見は、設立する団体の名称をめぐって二つに割れる。有産者と無産者の区別の上に立って無産者に恩を施すが如き名称は不当であるとして、ユングらは会の名称を「相互扶助・教育協会」に変更することを主張、これに対してカンプハウゼンらはベルリン中央協会の呼びかけにある名称を採用しようと抵抗した。続いて一一月一四日の規約起草委員会でも再び意見は対立し、票決に敗れたカンプハウゼンは脱会を余儀なくされる。[6] 以上のようにケルンを中心とした反政府派の分化は、一八四四年末にやっと自由派の明確な分離に到達した段階であった。

先に触れた〃哲学的社会主義〃（或は〃社会主義〃〃共産主義〃〃人間主義〃）の中核的な担い手集団とは、実はこの自由派の脱落した集団、単なる政治的改革に反対する反自由主義の集団に他ならない。「福祉協会」運動で目立った動きをしたメンバーを〃共産主義者〃と呼んでこのことを確認しているのは官憲の側ばかりではない。エンゲルスもまた「福祉協会」設立集会について「ケルンの集会は指導的な共産主義者の演説によって大いに感銘を受けたので、協会の規約を作成する委員会が選出されたが、その大部分は断固たる共産主義者で構成される程であった」と報じている。[7] ところでこの集団にはどのような人々が属していたか。主なメンバーを拾ってみよう。先ずゲオルク・ユングが引き続き活動している。「福祉協会」運動で改称派をリードしたのは彼であり、集会での「真の人間的修養」「人間の本性の内にある」互恵主義など[8]についての発言は〃人間主義〃の淡い反映を示している。ユングはまたパリのマルクスと繋がりを持っている。一八四四年春にケルン・グループのマルクスへの醵金運動を主催したのは彼であるし、一八四五年初めのマルクスへの醵金活動に際してもヘスやエンゲルスの集めた資金が彼の手を通じてブリュッセルへ送られている。その他ユングは『独仏

年誌』の密輸入も試みている。[9] 彼が集団から脱落してゆくのは一八四六年一月に入ってからである。[10] また一八四四年一〇月にドイツを離れたので、「福祉協会」運動には顔を見せていないが、カール・グリューンもこの集団に属していた。一八四三年八月以来ケルンに落ち着いたグリューンは、一八四四年半ばにはヴェストファーレンへ出かけて〝哲学的社会主義〟の宣伝を行なっている。ユングはパリのマルクスに「以前は幾分浅薄で尊大だったグリューン博士は当地と取り別けヴェストファーレンで非常に良い効果を及ぼしている」[11]と書き送っている。更にカール・デスターが「福祉協会」運動の際、集会の記録係りを務めるなどの活動をしている。またユングがマルクスに報じている所によれば、彼とデスターが、「福祉協会」運動を側面援助するため設立されたパンとスープの無料配給所を指揮していた。[12] この無料配給所の幹部の中には、ケルンの第五歩兵中隊に将校として勤務していたヨーゼフ・ヴァイデマイアーの顔が見える。彼は一八四五年の春正式に退役する前から、カール・グリューンの仲介によって『トリール新聞』の編集員を務めている。[13] ヴァイデマイアーの故郷ヴェストファーレンには、ユリウス・マイアーのサロンに集まるオットー・リューニングらのグループがある。先述のグリューンの宣伝旅行を助けたのはこのグループである。このグループは機関紙『ヴェーザー汽船』後に『ヴェストファーレン汽船』を持ち、軍隊内にフリードリヒ・アネーケらの同調者を持っていた。[14] 勿論ヴァイデマイアーはこのグループと密接な繋がりを持っていた。ドイツ国内のこの〝哲学的社会主義〟の集団に対応するのが、パリのドイツ人〝亡命者〟の『前進！』紙グループである。ヘルヴェーク評価をめぐってマルクスと争い、シュレージエン蜂起に否定的な態度を取って孤立し、脱落したルーゲを除いて、ハインリヒ・ベルンシュタインの『前進！』紙編集局に集まるベルナイス（一八四四年七月以後同紙の編集者）、ゲオルク・ヴェーバー、マルクスらの「人間主義者」達はまだ一つの纏まりを示していた。[15] ヘスとエンゲルスもまたこれらの人々と共に〝哲学的社会主義〟に属している。というよりこの二人は〝哲学的社会主義〟の最古参なのである。ヘスは、既に述べたように『ライン新聞』時代以前にもう実質的な社会主義者であった。エンゲルスは一八四二年末にそのヘスの働きかけを受けて社会主義へ転向した。[16] このところをエンゲルスは、「共産主義は新へー

ゲル哲学の全く必然的な帰結であった。〔……〕ヘス博士がこの党派の事実上最初の共産主義者であった」「まるで不案内か、全く関心のない読者のために社会主義について書いていた二人の可哀想な奴〔勿論ヘスと彼自身のこと〕の代りに、今では〔一八四四年末〕この問題についてあらゆることを聞きたがっている何千という人間に、新しい福音を説いている数十人の練達の著述家がいる」[17]という形で伝えている。そしてこの著述家の中にマルクス、ヘス、グリューン、リューニングらと共に自分を並べていることは、まだ彼が〃哲学的社会主義〃から自分の立場を区別する必要を感じていないことを示している[18]。

以上のように一八四四年から四五年初めの段階では、ヘスもマルクスも人脈的には〃哲学的社会主義〃の集団に属していたと言える。この集団を、人員獲得と出版物利用を狙うマルクス、エンゲルスらのグループとヘス、グリューンらの〃真正社会主義者〃のグループとの同盟と見做そうとする向きもあるが、これは無理である。相手のグループとの立場の相違を前提しないような党派間の同盟は、凡そ同盟ではないし、マルクス、エンゲルス、デスター、ヴィイデマイアーらがこの時期に特別の連絡網を持っていたという形跡もない。確かにエンゲルスは既に一八四四年の末からユングらの態度やヘスの立場に内々の批判を漏らしている[19]。しかしその帰結はまだ現われていない。エンゲルスが自分の立場を専ら「共産主義」と呼称し始めるのは一八四五年四月頃[20]、ヴェストファーレンの社会主義者と悶着を起こすなどして集団全体から孤立状態になったグリューンを捉えて攻撃を始め[21]、それと平行して「現在、ドイツの文献の中で、真正・純粋・ドイツ的・理論的な共産主義・社会主義の根本原理として披露されている大言壮語」「私自身の著作も、その例外とはしない[22]」と自己批判するのがこの年の半ば、「民主主義、それは今日では共産主義である[23]」として政治主義への回帰を示すのがこの年の九月、フォイエルバッハ主義、〃人間主義〃の清算、並びに〃唯物史観〃の確立についてマルクスと了解に達すべく『ドイツ・イデオロギー』の共同執筆を始めるのが同年末、そしてマルクスと共に、ブリュッセルからコントロールされる通信網の形成と他の潮流の本格的批判に乗り出すのが一八四六年初めのことである。一八四四年から四五年初めの時期

にマルクス・エンゲルス・グループを想定することは一八四五年末以降の事態の読み込みであると言わざるを得ない。

マルクスはヘスと類似の私的所有批判を展開しており、且つ外面的に見ればヘスと共に〃哲学的社会主義〃の流れに属していることが以上で明らかになった。しかしこのことはマルクスが主観的にヘス達と異なった立場を取っている可能性を必ずしも排除しない。従ってこの点については別の検討が必要である。それにはヘスとマルクスの両者が標榜している主義を比較してみるのがよい。

(i) マルクスは『聖家族』に於て自分の志向を「現実的人間主義」と称し、「フォイエルバッハが理論の領域で、フランスとイギリスの社会主義・共産主義が実践の領域で、人間主義と相等しい唯物論を表わしている」[24]と説明している。また『経哲手稿』では、神の否定としての理論的人間主義＝無神論、私的所有の否定としての実践的人間主義＝共産主義という二つの志向を統合する「ポジティヴな人間主義」「社会主義としての社会主義」を唱えている[25]。

ドイツに於ける無神論＝哲学の流れと、フランスの共産主義・社会主義の流れとを綜合するという立場は既に『二一ボーゲン』論文のヘスが表明しているところである[26]。勿論ヘスは一八四四年に入っても「社会主義の哲学的基礎付け」「ドイツの理論とフランスの実践の統一」という立場をそのまま堅持している[27]。ただこの時期になると先述のように理論はフォイエルバッハ哲学に特定される。そして「人間主義」という新しい呼称が登場してくる。「完成されたドイツ哲学、即ちフォイエルバッハの社会主義に対する関係は、理論的人間主義と実践的人間主義との関係である」[28]云々。

フォイエルバッハに対する距離感の違い、唯物論を称することを潔しとするか否か、といったズレがここにもある。しかしながらヘスとマルクスが標榜している立場の基本的な一致は否み難い。そしてこの一致は〃理論的側面〃〃実践的側面〃でそれぞれ詰めを行なっても崩れない。

(ii) 両者のフォイエルバッハ評価については前節で論じたとうりである。

(iii) 他方〃実践的側面〃でも、両者は社会主義・共産主義に対して同じ様な態度を取っている。

(α) 先ず〃粗野な共産主義〃に対する批判の相似が目に付く。マルクスが「共産主義はその最初の姿に於てはただ私的所有の普遍化と完成にすぎない。」「私的所有の最初の積極的な止揚、粗野な共産主義は、ポジティヴな共同体として自己を措定しようとする私的所有の低劣さの一現象形態にすぎない。[32]」と述べれば、ヘスの方も「フランス共産主義は意識されていない現代小商人世界の本質の現象態にすぎない。〔……〕共産主義と小商人世界の区別は、現実的人間的所有の完全な外化即ち小商人世界のこの事実と、この外化の必然的な結果即ち外的な取得とが、共産主義に於てはあらゆる偶然性を取り去られる、つまり理想化されるということにすぎない。[33]」と厳しい。

(β) これとは逆に両者ともプルードンに対しては社会主義・共産主義の潮流内での最高の評価を与えている。[31]「人間主義」しかも社会主義・共産主義と互換の「人間主義」を名乗ることが、当時の文脈で持っていた意味をマルクスが知らなかった筈はない。周囲の〃哲学的社会主義〃の潮流と混同されることを潔しとしなかったのならマルクスはそのことを特記しているだろう。更にマルクスはヘスとの関係でも立場の相違を明確にする必要を感じていなかったと言える。既に『二一ボーゲン』論文に見られる共産主義とドイツ哲学の平行関係、粗野な共産主義についての或る種のイメージ、プルードン評価などについては、マルクスはヘスを下敷きにしていると見られても仕方がない。またヘスがドイツ哲学の最終成果をフォイエルバッハに特定したのはパリ時代のことであるから、ヘスがフォイエルバッハと社会主義・共産主義を平行させていることも承知していたであろう。その上、当時確実にヘスの名前を連想させた、イギリスでは物質的、フランスでは政治的、ドイツでは理論的な経路を取って社会主義が発展するという三国図式さえマルクスは取り入れているのである。[32]以上のようにマルクスは彼個人という点でもまだ〃哲学的社会主義〃の外にはいかなかった。従って当時の情況の中でヘスとマルクスを Gesinnungsgenossen と位置付けることには不自然な点はない筈である。

マルクスは一八四四年から四五年の初め頃、ヘス派社会主義ではないにしても、経歴という点ではヘスを primus inter pares とする〃哲学的社会主義〃の流れに属していた。勿論このことは両者のフォイエルバッハ〃疎外論〃援用の先後問

題に決着をつけるわけではない。しかしマルクスがヘスの中に前節で示したような類似の論点を見出しても[38]自分の考を改める機縁などにはしなかったという点は保証してくれる。社会主義の位置付け方という点での影響と合せて、一八四四年頃のマルクスにとってヘスの存在は決して小さくなかったと言えるだろう。

① Peter von Struve (Studien und Bemerkungen zur Entwicklungsgeschichte des wissenschaftlichen Sozialismus, *Die Neue Zeit*, Jg. 15, Bd. 1, 1896, S. 69), D. Koigen (*Zur Vorgeschichte des modernen philosophischen Sozialismus in Deutschland*, Bern 1901, S. 148 f.), E. Hammacher (Zur Würdigung des „wahren" Sozialismus, *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*, Bd. 1, 1911, S. 89), T. Zlocisti (*Moses Hess, der Vorkämpfer des Sozialismus und Zionismus, 1812-1875*, 2. Aufl., 1921, S. 234. Vgl. auch S. 156, 166) らがマルクス＝〝真正社会主義者〟説を取っている。H. Singer, *Die Theorie des Wahren Sozialismus*, Diss., Hamburg 1930 も同意見ということであるが未見。

これに対して Georg Lukács (Moses Hess und die Probleme der idealistischen Dialektik, *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*, Bd. 12, 1926, S. 105, etc.), Sidney Hook (*From Hegel to Marx*, London 1936, New York 1950, p. 217 f.) は断固〝真正社会主義者〟説を否定。F. Mehring (*Aus dem literarischen Nachlaß von Karl Marx, Friedrich Engels und Ferdinand Lassalle*, Bd. 2, 1902, S. 348. Siehe auch *Karl Marx. Geschichte seines Lebens*, Leipzig 1918, Berlin 1960, S. 118 f.) も〝真正社会主義者〟であったことはないと述べている。

最近では Silberner, *Moses Hess. Geschichte seies Lebens*, S. 229 ff. が〝真正社会主義者〟説を主張している。

② 「真正社会主義」という言葉を作り上げ、積極的に使用したのはマルクスではなくて、エンゲルスである。マルクスは「エンゲルスの行なった『真正社会主義』と『共産主義』の区別、ユートピア共産主義の諸体系と批判的共産主義の区別」(*MEW*, Bd. 4, S. 358) と述べてエンゲルスとのズレを示唆している。

③ この時代ドイツの知識人にとって社会主義と共産主義の間には社会主義は学問的で洗練された共産主義であるという程の区別しかなかった。人間主義はそれを以って社会主義・共産主義を基礎づけようという当のもの。

④ 『ライン新聞』については、Vgl. Hansen, *Gustav von Mevissen*, Bd. 1, S. 245-265, 276-282; W. Klutentreter, *Die Rheinische Zeitung von 1842/43 in der politischen und geistigen Bewegung des Vormärz*, Dortmund 1966.

⑤ Klutentreter, a. a. O., S. 28. 理事エングは一八四三年半ばになっても自己の原理を貫徹しえないという点で自由主義を批判している。G. Jung, Zur Geschichte der Rheinischen Zeitung, *Rheinische Briefe und Akten*, Bd. 1, S. 571 ff.

⑥ ケルンの「労働階級福祉協会」支部設立運動については Vgl. *Gesellschaftsspiegel*, Bd. 1, Elberfeld 1845, Nachdruck 1971, S. 23-29, 52-59, *Rheinische Jahrbücher zur gesellschaftlichen Reform*, Bd. 1, Darmstadt 1845, Nachdruck 1970, S. 225-247, *Rheinische Briefe und Akten*, Bd. 1, S. 678-682, etc.

(⑥) Rascher Fortschritt des Kommunismus in Deutschland. II, *MEW*, Bd. 2, S. 513. この記事にはイギリス人向けの誇張がある。しかし全くの虚構でないことはマルクス宛の手紙が保証してくれる。Engels an Marx, 19. Nov. 1844, *MEW*, Bd. 27, S. 10.

当局の見方については、Die Regierung Köln an den Oberpräsidenten, 24. Nov. 1844, *Rheinische Briefe und Akten*, Bd. 1 S. 694.

(⑧) *Rheinische Briefe und Akten*, Bd. 1, S. 681, *Gesellschaftsspiegel*, Bd. 1, S. 25, *Rheinische Jbb.*, Bd. 1, 226 f.

(⑨) D. Dowe, *Aktion und Organisation. Arbeiterbewegung, sozialistische und kommunistische Bewegung in der preußischen Rheinprovinz, 1820–1852*, Hannover 1970, S. 57, 93 f.

(⑩) Daniels an Marx, 30. Jan. 1846, *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*, Bd. 1, Berlin 1970, S. 274.

(⑪) Zitiert nach Dowe, a. a. O., S. 58, Anm. 338.

(⑫) Ebenda, S. 77.

(⑬) カトイテヤイトーについては、Vgl. K. Obermann, *Joseph Weydemeyer. Ein Lebensbild 1818–1866*, Berlin 1968, S. 19, 29 ff. etc.

(⑭) カヨスムトトーコン・カネーブについては、Vgl. K. Koszik, Das „Dampfboot" und der Rhedaer Kreis, *Dortmunder Beiträge zur Zeitungsforschung*, Bd. 2, 1958, S. 13 ff., Obermann, a. a. O., S. 19 ff., 37.

(⑮) 『前進!』カネーブについては、Vgl. J. Grandjonc, „*Vorwärts!*" *1844. Marx und die deutschen Kommunisten in Paris*, Berlin und Bonn-Bad Godesberg 1974, S. 23–39.

(⑯) Heß an Auerbach, 19. Juni 1843, Heß, *Briefwechsel*, S. 103.

(⑰) Fortschitte der Sozialreform auf dem Kontinent, *MEW*, Bd. 1, S. 494; Rascher Fortschritt I, *MEW*, Bd. 2, S. 509.

(⑱) Ebenda, S. 512. 「ドイツに於ける共産主義の急速な進度」と題するこの連続記事を通じてエンゲルスは くくらいわゆる『真正社会主義者』と彼自身やマルクスとを区別していない。

(⑲) Engels an Marx, Anfang Okt. 1844, *MEW*, Bd. 27, S. 5, Engels an Marx, 19. Nov. 1844, ebenda, S. 9, 12. 一八四五年三月の『イギリス労働者階級の状態』くの序文では不満は表面化している。*MEW*, Bd. 2, S. 233.

(⑳) Rascher Fortschritt III, ebenda, S. 519. くくをくネイン・ヒョムムトムらちりの動きと従った。*Rheinische Jbb.*, Bd. 1, 173 f. Anm.

(㉑) Vgl. Grün an Heß, 6. Aug. 1845, Heß, *Briefwechsel*, S. 131 ff., Grün an Heß, 1. Sept. 1845, ebend, S. 138 f.

(㉒) Ein Fragment Fouriers über den Handel, *MEW*, Bd. 2, S. 605.

(㉓) Das Fest der Nation in London, ebenda, S. 613.

(㉔) Die heilige Familie, ebenda, S. 7, 132.

(㉕) Ökonomisch-philosophische Manuskripte, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 125 f., 166 f. Siehe auch S. 114.

(㉖) Sozialismus und Kommunismus, *HS*, S. 199–202, Philosophie der Tat, *HS*, S. 220–223.

(㉗) Über die sozialistische Bewegung, *HS*, S. 300, 303, etc.

(㉘) Ebenda, S. 295. Siehe auch S. 300, 305 f, etc., Fortschritt und Entwicklung, *HS*, S. 283 f.

(㉙) Ökonomisch-philosophische Manuskripte, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 111, 113.

(㉚) Über die Noth, *HS*, S. 323. Siehe auch S. 324, 325, 325 f., Mönke, *Neue Quellen*, S, 49 f. 『リーガン』論文については、*HS*, S. 205, 225. を見よ。

ない。しかし一八四四年のヘスの帰国後もパリとケルンの間で手紙や原稿の遣り取りはあった。Vgl. Heß an Marx, 3. Juli 1844, Mönke, *Neue Quellen*, S. 92-94, Heß an Marx, 17. Jan. 1845, Heß, *Briefwechsel*, S. 105-108.

㉛ *MEW*, Bd. 2, S. 32 f., 44, etc.; *HS*, S. 213, 223, 255, 293.

㉜ Ökonomisch-philosophische Manuskripte, *MEGA*, I, Bd. 3, S. 134.

㉝ 「ヘスの論説の多くは一八四五年に入って出版されており、「貨幣制について」を除いて、マルクスが出版前にそれらを見たという証拠は

おわりに

一八四三年末―四五年初めの時期のマルクスが、ヘスの一方的影響下にあったか否かは暫く措くとして、少くとも、市民社会批判の基本線をある程度自覚的にヘスと共有していたこと、この点を本稿は明らかにして来た。勿論これは初期マルクスの相貌の一面にすぎない。しかしまたマルクスの思想的発展、更には初期社会主義と〝批判的共産主義〟との連関を考える上で見落すことの出来ない局面でもある。最後にこのことを確認して筆を擱くことにしたい。

（京都大学大学院生・　　）

'*San kuo chi*' 「三国志」, written by *Chen Shuo* 陳寿, in which the first estimation of Chu-ko Llang in history appeared. Then, the article treats the other contemporaries' views. They esteemed him rather as an excellent governor. It was almost the same with Chen Shuo, while *Chang Fu* 張輔, a cotemporary of Chen Shuo, esteemed him highly both as a governor and as a general.

Moses Heß und der junge Marx

von

Kenji Taniguchi

Karl Marx ist im Winter 1843/44 Kommunist geworden. Wurde er dabei von Moses Heß eingewirkt, der als Mitredakteur in die "Rheinische Zeitung" den Kommunismus "eingeschmuggelt" und den jungen Friedrich Engels zu seiner Sache gewonnen hatte? Das ist die erste Frage, in dem vorliegenden Aufsatz zu prüfen. Die auffallende Ähnlichkeit der Ansichten von Heß und Marx nach ihrem Verkehr in Paris, die hier hervorgebracht wird, zeigt uns die Möglichkeit der Einwirkung, nicht ohne Vorbehalt doch, insbesondere in bezug auf die Anwendung Feuerbachs auf das soziale und ökonomische Gebiet. Und durch dieselbe Ähnlichkeit wird unsere zweite Frage ebenso geklärt, ob Marx "Wahrer Sozialist" war wie Heß. Mit Rücksicht auf die Verwicklung der Richtungen in der damaligen rheinischen Opposition stellen wir fest, daß Marx, wenn auch kurze Zeit, mit Heß und einer Anzahl von Oppositionsleuten vertrat den philosophischen Sozialismus oder "Wahren Sozialismus", wie Engels ihn nannte.